

半世紀前からの

贈り物



||今、蘇る「文集」||

前号までのあらすじ

思いもかけず内田氏に届いた

た小学2年のときの文集。

文集を開くと、同級生た

ちの懐かしい文章が目

び込んできました。いろ

んなテーマごとに書かれて

いる文集を読み進むうち、

自分の書いた文集に行き当

りました。そして、次には…。



蒲郡市民間大使

内田雅敏・プロフィール

蒲郡町生まれ

東京弁護士会所属

著書「乗っ取り弁護士」、

「これが犯罪?ピラ配りで

逮捕を考える」など多数

女の子の文章は「花」「お母さん」「おつかい」など多い。

かびんの花

花畑にきれいな花がさいっていたので、お母さんに聞いてきつもらいました。学校にもついで教室の花びんに入れておきました。あくる日わたしがもつてきた花を見ると、もうしおれていました。

(M・A 女児)

おつかい

お母さんが「恵津ちゃん、やおやさんへいつて来てちょうだい」といきました。わたしは「なにかうの」ときいたら、「おみかんと大こんよ」といったので、いそいでやおやさんへはしつていきました。

(E・M 女児)

M・Aは、お姉さんタイプで密かに憧れていたが、30代ごろになくなったという。

父親のことを書いたものも少なくない。

おとうさんのたばこ

おきやくさんがくると、おとうさんは、すぐたばこをすいます。あのけむりが、やあらしくてたまりません。「やめりん」といっても、ちつともやめません。おこつてなぐつてやるとやめます。いつでも「やめよ」「やめよ」というとへんなかおをします。

(H・O 男児)

元気のいい女の子もいた。

けんか

おぜきちんが、いつもわたしのあたまをぼこぼこにやぶる。くやしからなぐつてやったら、またなぐられた。女の子はよわいでつまらん。

(K・A 女児)

その「おぜきちん」はこんなことを書いている。

おこずかい

もうすぐお正月だな。ぼくはうれしいよ。おこずかい百円ぐらいきつとくれる。何をかおうかなあ。

(M・O 男児)

彼が小学校3年生ごろまでの「番長」でクラスを仕切っていた。おもしろい社会観察もある。

どろぼう

えきでどろぼうが、おまわりさんにとらまっています。ちょっとみるとわらいながら、たばこをすっています。おとうさんが、あまりみてはいけませんといいました。

(T・O 女児)

彼女は当時から姉御肌でしっかり者であつたように思う。泥棒といえば、私にもこんな体験がある。あれは確か旧盆が終わり、母方の祖父と一緒に仏への供え物のナスやきゅうり(割り箸を折ったのを刺して、仏が乗ってくる馬などを作った)などを海に流しに行つたときのことだ。途中田んぼのところまで人がいっぱい集まつて何かを捜していた。泥棒が逃げ込んだので捜しているのだと祖父が説明してくれた。

海からの帰り、同じ処を通つたところ、丁度捕らえられた泥棒が縄で後ろ手に縛られて引き立てられて行くところに出くわした。田んぼの中を逃げ回っていたのであろう。体が文字どおり泥だらけであつた。こわごわ見たところ、まだ若い感じの男で目を落とし無念そうに引き立てられて行つた。

(つづく)